

高原康彦
(1996年～1998年会長)

寄稿の依頼を受けたとき、二つの言葉がすぐに想起されました。一つは、“老兵は死なず、ただ消えるのみ”，いま一つは、“親はいなくても、子は育つ”の言葉です。

私も、経営情報学会との関係においては、消える関係になろうとしています。そのときの老兵の役割は、歴史の語り部ということなのでしょう。私が、当学会の会長になったのは、松田先生、宮川先生の後で、学会設立のまさに直後でした。設立は、決して平坦なものではなく、当時前のOA学会の一部の人たちが、“経営情報学会”をすでに立ち上げていました。ならば、経営情報学をやりたいのならば、そこに合流するのが常識的の話でしょうが、後から経営情報学会を立ち上げて、前の人たちに、そこに合流しろということになれば、もめないのが不思議だろうと、思います。ただしこのことは、経営情報学とは何か未確定の状況下のことでした。今でも、多分、経営情報学は何かと問われれば、言葉に窮することになるかと思えます。社会の実態が、学問に先行している例かと思えます。私も、東工大で、イヤとばかりで、経営情報の授業を起こしました。初代会長は松田先生で、先生が学会を作られたわけですが、松田先生は温厚な方で、ことを起こすのは好まれなかったと思いますが、どうして強引なことをやられたか、ついにお聞きする機会を失ってしまいました。そのようないきさつがあったので、OA学会と合同できないかという話がありました。弱小学会を二つ存続させるのは無駄なことだということで、私が会長のとき、試みとして、両者の全国大会

を、合同で開いたことがありました。その後合同が進まなかったのは、結局文化の違いということかと思えます。OA学会は、会計学会の文化を継ぎ、新しい経営情報学会は、OR学会の文化を継承していたからでしょう。学会が弱小であるかどうかは、学問の問題ではなく、会員の数の問題、それは学会の財政基盤の問題であります。当時の理事会の最大の話題は、会員をどう増強するかでした。経営情報を生業とする人は、ソフトウェア会社の人、学校の人、などたくさんいるわけですが、その人たちのすべてが会員であることとは、現実にははるかに程遠いのではないかと、思われます。要するに、学会が求心力に乏しいということに尽きると思えます。学会の存在意義は、何かということになりますが、昔から言われていたことの一つは、査読付き論文の製造の場であることです。この点では、学会はもちろん役割をはたしてきたと思えます。これだけで十分とは誰も言わないでしょうが。

学会はもちろん学問の進化に寄与する必要があります。学問の進化には、幅と深化が問題となると思いますが、幅に関しては、逆説的言い方をすれば、老兵の興味をひかない話題がたくさん議論されていることを見ると、頼もしく思えます。深化には、個別具体の実証研究ばかりでなく、原理原則に基づく議論も必要で、この方面の大いなる発展を期待しています。

人間も、20歳ともなれば、大変なものだろうと思えます。学会も立派なものと考え20周年を祝福いたします。